

国際文化学部鹿毛敏夫教授の

「若林仲秀～生活できる船を保有～」が掲載

●大分合同新聞朝刊 2016年4月11日(月)

2016年(平成28年)4月11日 月曜日

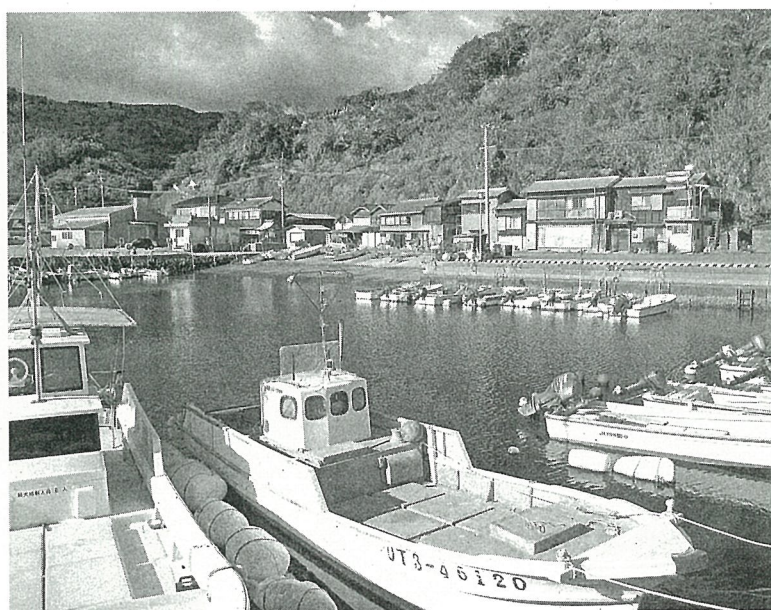
文 化 12

大友時代を
生きた人々

鹿毛 敏夫

16世紀の日本に群雄割拠の記録では「巨舟」と表現した戦国大名は、東日本とされていて、浙江省舟山島西日本ではその特質が異なる岑港に入港後、同地で起ります。武田氏や上杉氏なこった軍事騒動に巻き込まれが馬を駆使した陸上での活動に秀でていたのに対して、瀬戸内海を挟む中国・四国地方や大陸に近い九州の大名は陸のみでなく、海上での船を操った活発な活動大きな特色としていま担ったのは、大名の家臣団に編成された海の領主たちです。

例えば、弘治3(1555)年10月に大友宗麟が中国に派遣した船は、中国側行が木造船の接ぎ目をふさぐ桐油や鉄釘などの造船資材を入手して、わずか4カ月の期間で新船を建造できたことは注目に値します。その背景には、帰国に向け、あつたことに加えて、そも



若林氏の本拠地だった一尺屋の下浦＝大分市佐賀関

若林仲秀
生活できる船を保有

たことは注目に値します。その背景には、帰国に向け、あつたことに加えて、そも

たことは注目に値します。その背景には、帰国に向け、あつたことに加えて、そも

毎月1回掲載

そもその船に操船のみならず、造船の知識と技術を持つ人物が乗船していたことが推測されるからです。大友氏領国でそうした立場に適合する家臣として、例えば豊後国海部郡を本拠とする若林氏が挙げられます。同氏末裔に伝わった古文書群の中には、中世間の船上生活に対応可能な若林氏の海の領主としての特質を示す史料が少なくありません。

「津久見は海辺の事に候条、下され候わば、居屋敷として水居船などを覚悟つかまつり、海上御用などをも涯分馳走致すべく候」これは15世紀後半期の若林仲秀が、海に近い津久見を構え、大友氏のために「海上御用」の馳走奉公をしたいと記したものです。

「水居船」とは「家船」との名称で紹介される水上生活船の一種です。一尺屋を中心とした海部郡の海岸部に領地を持つ若林氏は、陸上の屋敷に加えて、長期的な船上生活に対応可能な船を保有して、水陸両方で活動していたことを証しています。

若林家の古文書にはこの他にも、「船誘」(船の建造)を指示した宗麟の書状もありです。西国大名による遣明船の派遣などの広域的な海外交易活動は、海に生きる武士たちの優れた造船や操船の技術に支えられたものといえるでしょう。

(名古屋学院大学国際文化学部教授、大分市出身)